福井大学リポジトリ
UNIVERSITY OF FUKUI
REPOSITORY

# 幼児教育現場における絵本の繰り返し読みきかせと実体験の相乗効果ー幼児の変化と教師の思考の深まり



| メタデータ | 言語: jpn<br>出版者:<br>公開日: 2011-06-09<br>キーワード (Ja):<br>キーワード (En):<br>作成者: 竹内, 恵子, 市原, 香奈子, 斎藤, 弘子<br>メールアドレス:<br>所属: |
|---|---|
| URL | http://hdl.handle.net/10098/3354 |

福井大学教育実践研究　2009，第34号，pp.21－30

教育実践報告

# 幼児教育現場における絵本の繰り返し読みきかせと実体験の相乗効果
## ― 幼児の変化と教師の思考の深まり ―

福井大学教育地域科学部　竹　内　惠　子
市　原　香奈子
同附属幼稚園　斎　藤　弘　子

絵本の読みきかせは，幼稚園や保育園で日常的に行われる活動である。教師が意図的に絵本を選択する場合，なんらかのねらいがあって選択される。子どもたちの発達段階，日々の生活，興味，季節など様々な観点から選び出される。絵本の主人公に会うという体験を組み込んで，繰り返し同一絵本の読みきかせを行う実践を通し，子どもたちの反応や教師の思考について検討した。絵本の読みきかせに体験を取り入れることで，子どもたちの絵本のイメージはより深まった。子どもたちを観察することで教師が自らの保育実践をふりかえることにもなった。

キーワード：絵本，読みきかせ，幼稚園教師，体験

### 1．はじめに

絵本の読みきかせは、幼稚園や保育園で日常的に行われる活動である。

幼稚園教育要領[1]のなかでも絵本はとりあげられている。絵本は「言葉」領域に位置づけられ「日常的に必要な言葉がわかるようになるとともに、絵本や物語などに親しみ、先生や友達と心を通わせる」ことがねらいとされている。そして取り扱いについては、「絵本や物語などで、その内容と自分の体験を結びつけたり、想像を巡らせたりする楽しみを十分に味わうことによって、次第に豊かなイメージをもち、言葉に対する感覚が養われるようにすること」となっている。

絵本の読みきかせは、子どもたちからの要望で絵本が選択されることもあれば、教師が意図的に選択する場合もある。教師が選択する場合は、なんらかの意図、ねらいがあり、子どもたちの生活や発達に即した絵本が選ばれる。その際、他の保育活動や季節と関連づけて行われることも少なくない。物語絵本をその後の発表会の劇で演じたり、食べものの絵本と季節行事を組み合わせたり、各園、各教師によって様々な組み合わせがなされている。また、幼児期の子どもたちは同じ絵本を何度も繰り返し読みきかせされるのも好む。繰り返し読みきかせされるなかで、子どもたちは安定した対話パターンを楽しんだり、前回とは異なる点に着目する言語反応がみられたり、子どもたち自身が絵本を読むようになるといった行為が見られるという[2]。一方教師は子どもの反応に基づいて先を見通し展開を考えながら行動を決定すると指摘されている[3]。

本研究では、絵本の主人公に会うという体験と、体験につながる絵本の繰り返し読みきかせを組み合わせた保育実践を行い、体験が加わることで、子どもたちの言動や遊び、教師の思考がどのようになるのか検討した。

本稿での「読みきかせ」は担任教師によるクラス集団に対する読みきかせとし、家庭における読みきかせや図書館等で開催される固定されない集団に対する読みきかせとはしない。

### 2．研究方法

#### 2－1．対象

幼稚園５歳児クラス24名（男児13名、女児11名）および担任教師１名。

#### 2－2．とりあげた絵本

「イルカのラボちゃん」[4] すずきたかし文・やまざきようこ絵　2007年　福井新聞社

**場面数**

見開き１場面として15場面。最終場面の次ページには、ストーリーの説明とラボちゃんの写真が載っている。

**ストーリー**

福井県松島水族館にイルカの親子がいる。イルカの子ども（後にラボちゃんと名付けられる）は生まれたばかり。1997年のある日、ロシアのタンカーが沈没し福井県三国町の海岸に船首が漂着し重油が流出した。イルカのいるプールは重油で汚染され、イルカの移送を余儀なくされた。水族館の人やボランティアの人々が一丸となって、イルカの親子を県外の水族館に移し、重油で汚れた水族館を元に戻した。その後ラボちゃんとお母さんイルカは無事水族館に戻り、元気に暮らしているというストーリー。

重油流出事故は、子どもたちにとっては、自分たちが生まれる以前のことであるが、地元の水族館で実際に起

きたできごとが描かれている絵本であり，松島水族館に行ったことのある子どももいる。

この絵本が今までにこのクラスで読みきかせされたことはない。また家庭においてこの絵本を読んでいた子どもほとんどいない（保護者に対するアンケート調査より）。

### 2－3．手順

上記絵本を日時をかえて３回読みきかせを行う。

１回目は園で，２回目は絵本の主人公がいる水族館で絵本の作者（現館長）から話を聞き，主人公ラボちゃんのイルカショーを見学するという体験を組み入れて読みきかせを行う。その後，再び園で３回目の読みきかせを行う。

いずれも担任教師による読みきかせを行った。

| |
|---|
| １回目：園保育室<br>２回目：水族館の一室で読みきかせ後，作者の話を聞き，その後イルカショー見学。<br>３回目：園保育室 |

### 2－4．時期

2008年９月～11月。１回目および３回目の園での読みきかせは，保育活動内容を考慮し，担任教師の判断で読みきかせ日時を決定した。

１回目と２回目のあいだは１週間，２回目と３回目のあいだは10週間ある。

### 2－5．分析手続き

#### （１）読みきかせ場面の観察

担任教師による絵本の読みきかせ場面を，ＩＣレコーダーと２台のビデオカメラで教師と子どもをそれぞれ録画・録音し，教師と子どもの言動をテキスト化した。

横山[3-5]は保育のなかで行われる読みきかせは，保育の流れを意識し，読むための準備として子どもたちを誘うことから，読み終えて次ぎの活動に至るまでの全過程を読みきかせ場面として捉え，集団での読みきかせ場面の構成要因を「読みきかせの場面作り→導入→読みの過程→読後」としている。そして，再生刺激法（読みきかせ場面を録画したものを再生視聴させ保育者自身に思いを語らせる）を用いて，対話や行為の内容分析だけでなく，保育者の読みの過程での思考を取り上げ，行動とともに思考，読みきかせ中に着目される点を場面の構成要因として列挙し，活動の流れに対応させて時系列的に整理している。そして各要因に対して保育者がどのように考え，実際はどう行動しているのかをあきらかにしていくことで，場面がどう構成されていくのか検討している。

本研究では，横山氏の手法を用い，読みきかせ場面を以下の４つに分けて分析した。

①読みきかせの場面作り

②導入場面：読みきかせ前の活動から絵本の題名を読み始めるまで

③読みの過程：絵本の題名を読みはじめてから，最後のページを読み終えページをめくるまで

④読後：最後のページをめくり終えてから次ぎの活動にうつるまで

#### （２）読みきかせ場面後の子どもたちの観察

読みきかせ場面以後の保育活動中の子どもたちの様子を観察記録した。

#### （３）担任教師へのインタビュー

読みきかせを実施した数日後，教師に録画したビデオをみせ，自由に教師の思いを話してもらった。インタビューは録音しテキスト化した。

## ３．結果

#### （１）読みきかせ場面の観察

##### ①読みきかせの場面作り

■　１回目

降園前のひととき，保育室で黒板を背に教師がピアノのイスに座り，子どもたちは床に座る。床には六角形にビニールテープが貼られており，子どもたちはその枠内に座る。教師と子どもたちの他に教育実習生が子どもたちの後方に５名いる。

■　２回目

遠足当日。読みきかせ前にグループで館内を自由見学している。水族館内の一室に集合。教師は部屋のコーナーを背にしてイスに座り，子どもたちは部屋の中央で床に座っている。この日は，対象クラスともう１クラス合同で読みきかせをしたため，子どもの人数は48名。子どもたちの後方に他の教師３名，教育実習生９名がいる。

■　３回目

１回目同様の配置で着席。教師と子どもたち以外は録画をするスタッフが１名。

##### ②導入場面

■　１回目

降園前に子どもたちが教室の中央に集まって座っている。教師は静かになるまで待ち，後ろを向いている子どもに注意するなどし，全員が前を向いたところで絵本の表紙を提示した。

教師が「今日のお話は」と絵本を提示すると，ひとりの女児が「ラボちゃん」と答え，その後読みの過程に入った。絵本が事実に基づくことや，一週間後の遠足で水族館に行くことはこの場面では伝えていない。

■　２回目

２回目は，水族館の一室で行われた。子どもたちの座る位置の指示をしたのち，作者の話を聞く前にラボちゃ

んのことを思い出すために読むことを伝えた。その後子どもたちの聞く体勢を（教師）「もーいーかい？」（子どもたち）「もーいーよ」のやりとりで確認したのち読み始めた。

### ■ 3回目

3回目は，前の活動の続きで子どもたちは床に六角形になって座っている。

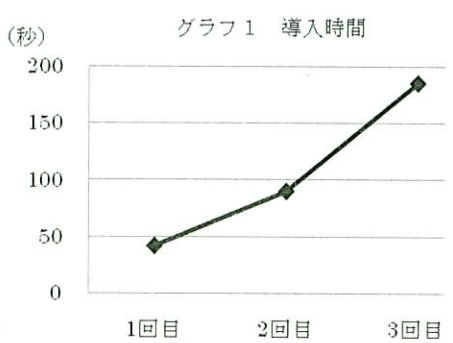
斜体は発語，以下同様。確定できない子どもはZとした）

*教師「今日はこれを読みたいと思います。（絵本を提示）みんな，見たことあったよね？」*
*Z児「うん」*
*教師「何だっけ？」*
*複数「イルカのラボちゃん」*
*教師「なんで今日先生が読むかというと，先生ね，今度の日曜日劇を見てこようと思うの。イルカのラボちゃんのお歌歌ったり，踊ったり，劇したりするのを。」*
*・・・・略・・・*
*教師「イルカのラボちゃんのお話，どんなんだったかなあって，みんな思い出しながら聞いてください。*
*・・・略・・・*
*教師「お外，今のお外みたいにさむーい冬。ラボちゃんどんなんだったか思い出しながら聞いてください。先生もね，よおく思い出しながら読むね。」*

教師はイスに座ってすぐに絵本を提示し，「見たことあったよね？」と子どもたちに問いかけた。その後，教師がイルカのミュージカルを見に行くことや，クラスの男児（A）が遊びのなかで『イルカのラボちゃんの船みたいに半分折れてる』と言っていたことを紹介したり，当日のどんよりした天気をとりあげて，絵本のなかの天候が荒れているときのラボちゃんの様子を思い出させたりなど，3回のなかでもっとも長く時間をとっていた。

### ■ 導入の所要時間

導入時間は回数をおうごとに長くなり，3回目は1回目の4倍以上かけている（グラフ1）。




### ③読みの過程

### ■ 1回目

1回目の子どもの発話は，絵本の内容に伴うものが多く，解決策を考えたり，共感，疑問などがみられた。

（ゴシック体は絵本の地の文章）

【第5場面】
**「海の水が汚れては，イルカも魚も生きていくことができません。『このままではイルカが死んでしまう！』『どうしよう・・・。』」**
*B児「（絵本を指さしながら）だったらあっちに逃げればいいのに。」*

【第11場面】
**「みんなが見守るなか，大きなプールに移されたラボちゃんとお母さんイルカは元気に泳ぎ出しました。『やったー！成功だー！』」**
*C児「やったー！」*
**「飼育係は思わず喜びの声をあげました。・・中略・・ホッとして飼育係は泣き出しました。ボランティアの人たちも泣きました」**
*D児「どうして？」*
*E児「どうして？」*
*F児「うれしいから」*

子どもたちの発話は多くないが，じっと絵本に見入っており，明るい内容の場面では，隣同士で微笑みあい，暗く悲しい内容の場面では，目を見開いたりといった様子が見られた。

### ■ 2回目

【第1場面】
**「北国の小さな港町に，イルカの親子やアザラシ，ペンギンやウミガメ，海の生き物たちが楽しく暮らす水族館がありました。」**
*複数「ここだよ。」「ここのことー。」*

【第3場面】
**「そのころ，油を運ぶ外国船が，大きな波を受け，まっぷたつに折れて，暗い夜の海をあてもなくさまよいはじめました。・・・折れた船から，油がどんどん流れだしています。」**
*G児「ひぇー！」*
*H児「ひぇ！」*
*I児「読んだことないよ」*
*J児「読んだことある」*
*K児「読んだことある」*

2回目の水族館での読みきかせでは，絵本の内容が，今自分たちのいる水族館で起こったことだと理解して読みきかせを聞いている様子がみられた。

「読んだことある」といった発話が複数の子どもからあり，2回目の読みきかせであることへの反応がみられた。

一方で，絵本に集中できず水筒を床に落として音を楽しんだりする子どもも複数いた。

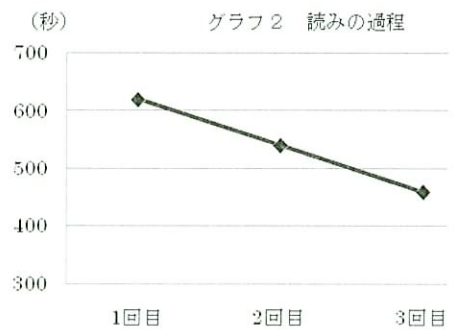
### ■　3回目

3回目の読みの過程の所要時間は3回の中でもっとも短い。子どもたちの発話はほとんどなく，じっと聞き入っている子がほとんどだった。ある男児は途中から涙を流しながら聞いていた。

教師は，1回目2回目とも絵本の絵への指さしや発話がなかったが，3回目の第3場面（船が折れた場面，A児が遊びのなかで語っていた場面）で「これだね」と言いながら指さしをした。

### ■　読みの過程の所要時間

読みの過程の所要時間は回数を重ねるごとに短くなる（グラフ2）。




## ④読後

### ■　1回目

読みの過程より子どもたちの発話は多い。

【最終場面の次ページ，写真ページを見せる】
*E児「かわいい！」*
*複数「ああぁー！」「かわいい！」*
*E児「ほんもののイルカだ！」*
*L児「ほんものの赤ちゃんだ！」*
*複数「え？え？」*
*B児「これラボちゃん？」*
*教師（うなずく）*
*複数「えー！！」*

最終場面の次ページにあるラボちゃんの写真をみせると，子どもたちから一斉に声があがり，ラボちゃんが実在することを知る。

その後，ひとりの子どもが水族館に行った経験を話しはじめると，あちこちで子ども同士の会話が始まった。

*M児「そうだよ，わたし知ってるよ」*
*N児「いるんだあ。どこにいるの？」*
*E児「ねえ，松島水族館にイルカいるよ。」*
*M児「うん」*
*E児「ラボちゃんだよね」*

このあと，教師は次週水族館に行くことを子どもたちに伝える。

*教師「はい，イルカのラボちゃんに会いに行きます。来週ね，みんなね，ラボちゃんに会いに行こうね。」*
*複数「ほんとう？！」「えー？」*
*M児「ほんとう？」*
*O児「ほんとに？」*
*D児「よっしゃぁ！」*
*E児「(立ち上がって) あ！イルカショーにいたんだ！松島水族館にいたんだほんとうは。ラボくんっていうんだよ，ほんとうは！ほんとうは男の子なんだよ！」*
*教師「ありがとうね」*
*E児「ほんとうは男の子！」*

ラボちゃんに会いに行くと伝えられると，子どもたちの表情はますます明るくなりそれぞれが話し出す。

E児は自分が経験していたことと絵本の内容がつながったらしく，それを友達に伝えている。

### ■　2回目

読みきかせをした水族館の部屋の隣室に，ラボちゃんの写真がスクリーンに映し出されており，それに気づいた子どもが話し出した。

【写真ページを見せる】
*複数「かわいい」*
*P児「あ，写真」*
*複数「かわいい」*
*C児「あれと同じ！（隣室のスクリーンをさして）」*
*P児「あれと同じ！」*
*Z児「あそこにテレビがあるんだよ」*

しかし，1回目ほど発話は活発にはならず，作者の話を聞くため移動した。

### ■　3回目

3回目は，読後すぐに教師が子どもたちに問いかけている。

【写真ページを見せる】
*教師「みんなイルカショー見たよね」*
*複数児「うん！」*
*教師「ラボちゃん，どんなショーを見せてくれたか覚えてる？」*
*Q児「スライディングとかしてた」*
*E児「ラボくんだよ！」*
*F児「輪っかとかでこうやってた（くぐる真似）」*
*教師「うん，やってた」*
*A児「それにとぶときがすごかったね」*
*教師「とぶときすごかったね」*

前方に座っている子どもたちは教師と，後方に座っている子どもたちは子ども同士で活発な会話がなされた。

そのため子どもたちの会話のすべてを聞き取ることはできなかった。

1回目のときに「ラボくんだよ，男の子なんだよ」と言っていたE児は，今回も同じ発言をしている。1回目の読後では，周囲の子どもたちは，E児の発言をただ聞いているだけであったが，今回は周りの女児達が「ラボちゃんだよ」「ラボちゃんのほうがかわいいよ」など，E児に反論する場面がみられた。

### （2）読みきかせ以後の子どもたちの様子

1回目，2回目の読みきかせ後の子どもたちの遊びの場面を観察した。

#### ■ 1回目読みきかせ後

3日後の保育活動のなかで，教育実習生が海の生き物を次々に絵描き歌で描いていった。クラゲやタコを描いていくと「クラゲ！」「タコ！」とクイズに答えるかのように盛り上がっていった。実習生がイルカを描き始めると，子ども達は「イルカ！」ではなく，「ラボちゃん！」「ラボちゃんだ！」と次々に声をあげた。描き終わってもなお「ラボちゃんできた！」という声が続いた。

遊びのなかで特に絵本の話が出たりすることはなかったが，保育室の絵本の棚においてある「イルカのラボちゃん」を自分で読んだり，友達に読みきかせしたりする子どもたちの姿がみられた。

#### ■ 2回目読みきかせ後

遠足から4日後，教師はたくさんの模造紙と絵の具を用意し「海の絵，水族館の絵，描いていいよ」と子どもたちに声をかけた。数人の子どもが集まってきて，クジラやイカ，イルカなどの生き物，波や泡，海草など海の様子を模造紙いっぱいに描いていった。最終的には15枚を超える絵ができあがった。

教師が子どもたちの描いた絵を友達の前で紹介し，描いた本人にどんな絵か説明させた。

*教師「（イルカの絵を指さして）これ誰だっけ？描いたの。Rちゃん？Rちゃんがイルカ描いてくれたんだよね」*
*S児「ラボちゃん！」*
*B児「ラボちゃんじゃない？！」*
*教師「ラボちゃん，ラボちゃんね」*
*T児「クラゲもいる」*
*教師「クラゲもいるね。すごい仲良しだね」*
*D児「ラボちゃんどこにいるの？*
*教師「（指で円を描いて示す）ここにもいる」*

*教師「これは何？Bくん，説明して」*
*B「これがニモで，この上がニモのおとうさん」*

絵を描きながら，子どもたちからは「ラボちゃん」だけでなく「ニモ」「スイミー」という名前が出ていた。いずれも映画や絵本の主人公である。

子どもたちは，遠足の帰りのバスのなかで「ファイティング・ニモ」を見ており，昨年度に絵本「スイミー」を読みきかせされている。

「ラボちゃん」「ニモ」「スイミー」は，いずれも生き物であり，水の中での話であること，みんなで力を合わせて問題を解決するという共通点がある。

子どもたちが描いた何枚もの絵には，子どもたち自身がストーリーをつけ，映画館ごっこに発展した。

また，廃材で作った海の生き物を，海をイメージした大きな模造紙に貼って保育室の後ろに掲示し，後日それを使って人形劇をし，さらに子どもたち自身が海の生き物になりきり，保育室全体を使った海ごっこへと発展した。

### （3）担任教師へのインタビュー

#### ①1回目読みきかせについて

■ 読みきかせのねらい，きっかけ

*絵本の前に山崎さん（画）との出会いがあって。それからこの館長さん（文）との出会いがあって，その，人としてのつながりを感じて。絵本というものと，ラボちゃんなり山崎さんなり，そういう人との出会い，子どもの遊びと，それがからまって面白いかもしれないということで。*

*絵本自体にぴたっとくっつかなくても水族館に行ったところで軽く「ああ，あのラボちゃんか」と結びつけばよいなというくらいで，あまり深く考えないで，悩みに悩んでこれをやったというよりも，本当の体験と結びつくことで，この絵本の見方があると面白いなと思っていた。*

*この絵本には，それからこれを描いた人たちには，伝えたいという強い思いがあって，そして直接会いに行くという，そこをからめると，きっと子どもたちに伝わるだろうと。その人たちの思い，イルカのラボちゃんは生きていて，ああやって成長したところを何らかの気持ちで子どもたちは受けとめるんじゃないかってことを思って。やってみよう！という感じで・・・。*

教師はこの絵本を読むにあたって，絵本の作者ふたりに会っている。直接会ったことで絵本にこめられた人々の思いを教師自身が強く感じている。

また直接会いに行くという体験を加えることで，子どもたちが何かを感じるであろうことを期待している。

■ 子どもたちの反応への期待

*読む前はこの絵本がどれだけ年長さんにぴたっとくるのか，そんなに確信をもって，ではなかったと思います。*

*・・・これを今まで子どもたちに読んだこともないし，これを取り上げて発表したこともないので，*

*どうかなあとは思ったんだけど。この年長さんたちは，心によく響く子どもだなあと思っているので，何か感じることがあるだろうと。*

*・・文章の長さとか，絵とか，それがどうのというのではなくて，これを描いた人たちの思いがしっかりしているので。伝えたいっていうものが，すごくしっかりしていて。遠足っていう形でサポートしてもらえるところもあって，絵本に対する確信はなく，読み始めた感じです。*

子どもたちが，園でノンフィクションの絵本を読みきかせされるのは初めてのことでもあり，「どうかなあ」と不安を含んだ発言をしている。

しかし，昨年度からの持ち上がりである教師は，子どもたちの成長を見守るなかで，きっと受けとめてくれるという期待を抱き，遠足という体験が入ることがサポートになって子どもたちは受けとめるだろうと感じている。

■　絵本にひきつけられていく子どもの姿

【第２場面（危険を予想させる場面）】
*ぴたっと。子どもたちがすーっと（絵本に）入っていったんだよね。*
【第４場面（人々が油をすくっている場面）】
*声の調子を落として。何かが起きたという感じで読んでいるところは，子どもたち，ぴたっとくいついていたと思います。*
【第７場面（イルカに名前をつける場面）】
*１回だけの読みきかせで，ボランティアの文字をもらって「ラボ」だって（頭に）入っていた子もいたんだなあと。１回だけしか読んでいないんだけどね。*
【読後】
*この絵本，思ったよりぴたっときたなと子どもの顔みて思いました。「この絵本はこの子には難しいなあ」という表情がみてとれたのが，多分片手でいるかいないかぐらい，と思って見ていました。*

とまどいと期待を持ちながら読んだ絵本であったが，子どもたちが惹きつけられていることを子どもの表情を見ながら教師自身は感じている。「ぴたっと」「すいつく」という表現が以後何度も出てくる。

１回目は，読みきかせのきっかけ・ねらい，読みきかせへの期待，子どもたちの反応がよかったことへの安堵感，確信といったことが述べられている。

### ②２回目読みきかせについて

■　絵本の読み方について

*・・子どもたちがある程度のるように，1回目よりちょっと抑揚をつけて読んでいると思います。「何かが起きるぞ」というところ，子どもたちの真剣さを引き出してやりたいなと思って，小さな声であんまり調子も変えずに読んでいるんです。（２クラスのため）倍の人数いるので読み方も変えて読んでいると思います。*

*お話自体長いので，あまりゆっくり読んでないです。時間かかるとつらい子がいるなあと思っているので，大切にしたい場面でなければ，はやめの感じで読んでいると思います。子どもたちに感じさせたいところだけ，そこだけをゆっくり読んでいると思います。*

*次の館長さんの話を直接聞く，と，この子たちにとって何年も前にあった，10年以上前にあったその話を聞くことが，子どもたちイメージできるんだろうか，難しくないだろうかと思うところもあって，館長さんのお話につなごうという意識が強かったように思います。子どもたちには，これから館長さんが話してくれるんだよ，先週イルカのラボちゃんのお話をね，幼稚園で読んでみたよね，もういっぺん思い出してみようか，今からイルカのラボちゃんのお話聞けるからねっていう話の入り方をしていると思うんですが。*

絵本の長さや子どもたちの理解度，子どもたちの気持ちの盛りあがりを考慮し，読み方の工夫をしていることを述べている。

また，読みきかせ後の水族館での体験につながるように意識している。

■　子どもたちの様子について

*○○ちゃんとか△△ちゃんとかよく見てた。・・誰でもぴたっとくる感じではないなと思ったんだけど，それでも子どもたちがぴたっとくるんだなあと思うのが，事故が起きて何かが起きて，お母さんとラボちゃんが出てくる，それで死んでしまうかもしれないというようなところ。ドラマがあるようなストーリーのようなところは，それなりにみんなちゃんと聞いていてイメージつかめた子がいるので。*

*・・・水族館にいるというところで，またピタっと子どもたちが聞いていた，具体的な今のこと，見えることについてはよく聞いているなあと思って。*

*あと，（絵本の）まんなか（あたり）がね，子どもにとっては難しいというかイメージわかない子もいるかなあと思ってこのときは見ていました。前に読んだときよりもはっきりと見えて，子どもによって様子が違うのがよくわかるなあと思って読んでいましたね。*

１回目より冷静に子どもの様子を観察している。

絵本のどの場面で子どもたちがどういう反応をするのかの確認，子どもによって理解の度合いが違うことも述べている。

■ 遊びの変化について

*ただ水族館に行って戻ってきてだったら，子どもたちのその後の遊びとか変わってきたんだろうなと思っている。人形劇みたいにして遊ぶのも，みんな仲間なんだよね。・・・図鑑とかそういうの探す子がいないというか。海の生き物であっても，一匹一匹というか一人一人というか，それに家族がいてお名前があって，そんなとらえ方をしたんだろうなと思います。図鑑のほうに流れる子がいなかった。*

イルカが自分たちと同じように生きているということを感じることで，見てきた生き物を図鑑で確認するという遊びではなく，人形劇や海ごっこといった遊びになったのではないかと考察している。

2回目は，自分の絵本の読み方と子どもたちの様子について，遠足後の遊びについて語っている。

### ③3回目読みきかせについて

■ 自分の読み方について

【導入場面】
*前置き長いなあ，今回。*
【第3場面（船が折れて油が流れ出した場面）】
*すいつきいいよね。この子達大きくなったんだなと。1回目2回目と比べものにならないくらい。ぴたっとすいついてて。だからね，声をいちばん落として小さい声で読むようにしたんだけど，それでもぴたっときてる感じでした。*

導入場面で，子どもの遊びを紹介したり水族館のことを思い出させたりして時間をかけていること，子どもが集中しているのでさらに声を小さくして子どもたちの集中度を試したことを述べている。

■ 子どもたちの様子について

*やっぱり3回目がいちばんね，くいついてすごく真剣に見ている感じですね。すごいね，すごい真剣な表情で聞いていることがよくわかって。・・・Fくんが「ぼく，涙出た」って言ってた。*

*1回目は，この絵本が年長さんにとってわかりやすいテーマかしら，生き物とかこの子たち好きだけど，ちょっと長いしね。本当にあったお話をこういう風に絵本にしたもの，本当にあったお話だよって結びつけて話することはなかったので「どうだろう？」と思ったけど，やっぱり2回目3回目になるにつれて，子どもたちが成長していったり，子どもたちが感じるものもね，増えてきたりするなかで，ああこの子達の中にしみこんでいるというかしみいっているというか，そういう実感を感じながら読みました，今回は。*
*子どもたちの表情なり真剣さなり。J児なんてぴくっとも動かなかった。ここらへんの男の子たちも，ぴくっとも動かない感じの，ぴたっとすいついてる感じの，よくわかったなあと思いながらみていましたね。*

子どもたちが絵本に集中していること，3回目がもっとも集中していると述べている。
また子どもたちの成長の実感を述べている。

■ 読みきかせ後の子どもたちの変化への期待

*3回目の読みきかせがどんな遊びにつながるかとかそのあたりは2回目とはまた違うだろうからわからないけど，「劇を見に行く」なり「絵本を読む」なり，年長さんのときみんなで感じたものが，あの子たちに残ればいいなという思いで読んだので，それがいつどんな形で出てくるかわかんないけど，もしかしたら小学校の生活科のなかでいきてくるかもしれないし，高学年になって，環境とかそのあたりをやるとき思い出すかもしれないし。この子たちのこれからにつながるといいなという思いで3回目を読みました。*

読後の遊びがどんなふうに展開していくのか，短期的な予想から小学校になってからといった長期的な期待へとひろがっている。

■ 保育のふりかえり

*この子らは年中のときに，私が魚やザリガニなんかを連れてきてせっせと生き物にふれあわせたので。これがこの子達にとってどういう意味を持つんだろう。とりあえず，身近な命に触れることで，その，おもちゃじゃない生きていることを，命があるっていうことを感じてくれればいいなと思って。*
*何十匹もザリガニ連れてきてね，毎日せっせせっせと。ザリガニだって怒るしね。ハサミふって怒るし，ぴくぴくって早く動くし。（子どもたちはザリガニを）お父さんや～お母さんや～と言ってたし，水があつくて死にかけたら，みんなで真剣に話をしたし，川へ放しにも行ったし。*
*それは年中さんの体験なんだけど，この学年生き物をすごく好きな子がいっぱいいるので，そのあたり，小学生とか大きくなったときというか大人になったときに思い出してくれれば。何か心にひとつ残るものであるといいなと思います。*

昨年度から子どもたちに対して行ってきた保育内容，子どもたちの経験についてふりかえっている。

3回目は，自分の絵本の読み方と子どもたちの様子について述べるにとどまらず，昨年度から現在にかけての自分の保育のふりかえりをしている。

## 4．考察

### 4-1．子どもたちの様子から

子どもの反応や遊びの様子を教師のふりかえりを含めて考察する。

#### （1）読みきかせ場面での子どもの発話および行動

読みの過程における子どもたちの発話や行動は，同じ

絵本であるにもかかわらず回によって異なる。

１回目は初めて聞くストーリーということもあり，絵本の内容についての発話が中心である。教師は当初，子どもたちが絵本の内容や長さについていけるのか多少とまどいも抱いていたが，子どもたちは絵本に集中し，ストーリーも理解していた。発話はむしろ読後に多く，ラボちゃんが実在することへの驚き，さらにそのラボちゃんに自分たちが会いに行くということを知らされてますます気持ちが高まっている。「幸せになってよかったね，おしまい」で終わる架空の話ではないこと，次の活動につながることが，読後の会話を活発にしたものと考えられる。

２回目は絵本の水族館にいるんだという実感を子どもたちは感じており，読みきかせの際も発話となって出ている。しかし１回目ほど集中度は高くなく後ろや横を向いている子もいた。いつもと違う場所であること，２回目で内容を知っていること，読みきかせまでにグループ活動をしていて興奮気味あるいは疲れていたことなどが原因として考えられる。読後も，園での読みきかせ後のような活発な会話は見られないが，次の作者の話を聞くための場所移動があったためであろう。

教師もインタビューで，大切にしたい場面でなければはやめに読む，次の作者の話につなごうという意識が強かった，と述べており，子どもの集中度が１回目ほどではないことを感じている。同じ絵本であっても，読みきかせされる環境や状況によって子どもたちの集中度は異なる。

３回目の導入で，教師はいくつか話題を出している。１回目２回目では，子どもが座る位置を指示する，聞く体勢になっているかどうかを確認する程度で絵本の内容にふれることはなかった。教師自身は，なぜ３回目でこのように時間をかけた導入をしたのかは語っていないが,2回目と３回目のあいだが10週あいていることもあったのかもしれない。ある子どもの遊びのときの発話を紹介しているが，子どもたち自身が遊びのなかでラボちゃんとかかわってきたことを思い出させることで，すぐにラボちゃんの話に入り込めるようにとの意図があったのかもしれない。

導入ではもっとも時間をかけていたが，読みの過程は３回目がもっとも短かった。子どもたちの発話はほとんどなくじっと聞き入っており，涙を流す子どももいた。教師も３回目がもっとも真剣に見ていると述べている。子どもたちは体験を通し，「わたしが会ったあのラボちゃん」が苦境にさらされ周りに助けられて元気に育ってきたことをより深く実感したものと考えられる。子どもたちの集中度が高く，発話さえ出ないほどの入り込みが，結果的に教師が読みを中断して発話や会話，ポインティング（絵本の絵を指さす行為）等で子どもの「飽き」をコントロールする必要がなかったといえる。

読後の会話は聞き取れないほど活発に行われ，教師対子どもにとどまらず，子どもどうしでの会話も生まれていった。遠足から10週あいていたにもかかわらず，水族館でのラボちゃんの様子を身振りしながら語る子どももいた。１回目ではＥ児の「男の子だからラボくん」という発言をただ聞いていただけの周りの女児が「ラボちゃんだよ！」「ラボちゃんのほうがかわいいよ！」と言いだして議論になったり，子どもたちのなかで水族館での体験と絵本のラボちゃんとが一致してより身近になっている様子がうかがえる。体験が入ることで，絵本のラボちゃんは，あの水族館で泳いでいたラボちゃんだ，生きているラボちゃんだという実感が子どもたちのなかで深まったものと考えられる。

### （２）子どもたちの遊びの展開

読みきかせ後の子どもたちの遊びは，１回目読みきかせですでにイルカ＝ラボちゃんとして子どもたちにインプットされている。また，保育室においてある「イルカのラボちゃん」の絵本を取り出して何度も読む姿もみられた。読みきかせされた絵本をあとで自分たちが読むという行為は他の絵本でもあるが，教師はふだんそういった行為をしない女児が翌日も読みたいと言ってきたことを述べており，何らかの強い印象を子どもが持ったことを感じている。

遠足後の遊びは，イルカにとどまらず，見た映画「ニモ」，読みきかせされた絵本「スイミー」など子どもたちの他の経験も加わった映画館ごっこ，人形劇，海ごっこへ展開した。教師は水族館へ行って，水族館と同じ生き物を図鑑で見て終わりにならなかったのは，ラボちゃんのストーリーを絵本で聞いていたからだろうと述べており，絵本と体験の相乗効果を感じている。

子どもたちの遊びのなかで，次第にラボちゃんそのものの登場は少なくなるが，「海の生き物」をテーマにした遊びは形をかえて長く続く。遊びが続くためには，絵本と体験の相乗効果がきっかけとなって生まれた遊びをさらに展開するための教師の援助が必要であろうが，担任教師は，廃材や絵の具，模造紙などを準備し，映画館の雰囲気を作って「上映してみたい！」という思いを引き出したり，保育室全体を海のイメージにして子どもが生き物になりきって大きく動き回れるような環境を作っていった。

絵本と体験の相乗効果は子どもの遊びを生み出していくが，その生み出された遊びをどう広げ深めるかは，教師の援助によって大きく影響される。

子どもたちの遊びは，教師のしかけや誘いにのったクラスの一部の子どもたちの遊びの展開であるが，一緒に絵を描いてストーリーを作って映画や劇にしていくなかで，子どもどうしの共有体験が積み重なっていった。絵本と体験の相乗効果が，教師の援助によって個々の思いの深まりだけにとどまらない展開をしていったことが本実践を通してみえてきたことのひとつである。

### 4－2．教師の思考から

教師は読みの過程において，いずれの回も子どもたちを細やかに観察している。あらかじめ子どもたちの反応を予測して読み，予想通りの反応が見られるとその手応えを「ぴたっと」「すーっと入っていった」と表現している。

しかし，3回のインタビューの中で教師の視点は変化していった。

| | |
|---|---|
| 1回目 | ・読みきかせのきっかけ・ねらい |
| | ・子どもたちの反応の期待 |
| | ・子どもたちの様子 |
| 2回目 | ・子どもたちの様子 |
| | ・読み方 |
| | ・子どもたちの遊び |
| 3回目 | ・子どもたちの様子 |
| | ・読み方 |
| | ・子どもたちの今後への期待 |
| | ・保育のふりかえり |

1回目は，絵本読みきかせのきっかけやねらい，子どもたちに伝わるのかどうかの多少のとまどいと期待，そして子どもたちが絵本に集中した様子について述べ，子どもたちが聞き入ったことへの安堵感もうかがわれる。

2回目は，子どもたちの様子に加え，自分の読み方について，また子どもたちの遊びの内容についてふれている。1回目より子どもたちの様子を冷静に見ており，自身の読み方に触れる余裕も見受けられる。

3回目は1，2回目同様子どもの様子や自分の読み方について述べているが，単にこの回に集中していることだけでなく，回数を追って子どもたちがより深く物語に入り込んでいる様子を述べている。自分の読みきかせも子どもたちを試すような読み方をしたとしているが，おそらく集中はとぎれないだろうという予想があるものと思われる。

1，2回目では，子どもたちがラボちゃんのことをどのように感じ，遊びがどうなるかといった比較的短期的なことだったのに対し，3回目では，絵本の内容にとどまらず今までの体験が子どもたちの今後につながるようにという長期的な展望や，自分の保育のふりかえりが語られたのが特徴的であった。

子どもたちの今後や今までの保育が語られたのは，一連の絵本の読みきかせがこれで最後ということもあるが，読みきかせ，遊び，体験が子どもたちのなかで積み重なり変化していくなかで，教師自身が昨年度からの子どもたちの経験や成長を感じ，自分が投げかけた活動や保育のふりかえりをするきっかけになったと思われる。

教師は，年中児からの持ち上がりである（学年としての持ち上がりなので直接担任しなかった子どもも現クラスにはいる）。昨年度教師は，ザリガニとのふれあいを長期にわたって展開し，生き物への興味関心，いのちの大切さ，その後のなりきり遊び，ザリガニを川へもどすかどうかの子どもたちの話し合いや葛藤など様々な視点を含む実践を行ってきた[6]。今回の「イルカのラボちゃん」の読みきかせと体験の実践への見通しが，昨年度の時点であったのかは定かではないが，昨年度の実践と子どもたちの学びの存在が，今年度の実践への自信と期待につながっているものと考えられた。

### 5．おわりに

実話に基づく絵本読みきかせに体験を組み合わせたことで見られた子どもたちの反応および教師の思考について検討した。

絵本の繰り返し読みきかせと体験を組み合わせることによる相乗効果がみられ，さらに教師の援助によって，個々の思いが共有体験にひろがり遊びが展開していく様子が観察された。

また教師の思考は回数を重ねるごとに絵本よみきかせそのものから子どもの遊びや子どもたちへの長期的な期待や自分自身の保育のふりかえりへと思考が深まっていった。

幼児教育現場において，絵本のよみきかせは欠くことのできない活動である。教材としての絵本は，ジャンルも難易度も様々なものがある。多くの絵本のなかから，教師が選ぶには，目の前の「この子どもたち」の経験や発達段階，教師のそれまでの保育や今後の展望など様々な要因があって「この一冊」を日々の保育のなかで選択しているといえよう。

付記：本研究は，平成20年度福井大学教育地域科学部学部長裁量経費（教育プロジェクト経費）の助成を受けた。

### 引用文献

1）文部省告示　幼稚園教育要領（1998）大蔵省印刷局
2）横山真喜子・宝川雅子（1999）保育の中での同一絵本の繰り返し読み聞かせ　－繰り返しの意義と繰り返し読まれる絵本の特徴の検討－　日本保育学会大会研究論文集（52）pp860－861
3）横山真貴子（1999）読みきかせを構成する保育者の思考と行動　－同一絵本の3回読みきかせ場面の分析から－　人間文化論叢　第2巻　pp169－181
4）すずきたかし，やまざきようこ（2007）イルカのラボちゃん　福井新聞社
5）横山真貴子（1998）保育における読み聞かせはどのように熟達するのか　－保育者養成専門学校の学生の視点からの検討－　人間文化論叢　第1巻　pp119－129
6）平成19年度福井大学教育地域科学部附属幼稚園研究紀要（2007）pp66－73

**Synergy Effect of Real experience and Repeated Reading Picture-book to Children in Kindergarten : Effect on Children's Behavior and Teacher's Thought**

Keiko TAKEUCHI and Kanako ICHIHARA and Hiroko SAITO

Key words : Picture-book, Reading picture-book to children, Kindergarten teacher, Real experience